





〈絵1〉山間の縄文集落



〈写真4〉縄文時代の土偶（上長尾遺跡）

方があったことは、神社の入口に鳥居<sup>とりい</sup>があることから想像できよう。このように、弥生時代の祭りの一端として、地域のまとまり＝クニを意識したようなところ、また稲作の普及により農耕儀礼<sup>のうこうぎらい</sup>を重視するようなところがあったのではないだろうか。

## 2 縄文時代の祈り

それでは、弥生以前の縄文時代にはどんな信仰・祭りがあったのだろうか。その一端がわかる遺跡・遺物を検討したい。伊豆市上白岩遺跡<sup>かみしらいわ</sup>（旧中伊豆町）は、東北・北海道に多い環状列石<sup>かんじょうれっせき</sup>（ストーンサークル）の一つである。環状列石は特殊な墓と考えられるが、秋田県大湯遺跡<sup>おおゆ</sup>や山梨県金生遺跡<sup>きんせい</sup>のように男性を象徴する石棒<sup>せきぼう</sup>のようなものが立てられている場

合もあり、大地の豊穰<sup>ほうじょう</sup>を祈る意味合いもあったのではないだろうか。伊豆市大塚遺跡<sup>おおつか</sup>（旧修善寺町）には、普通は床に何もない堅穴住居の集落内に、特別に炉の周囲や入口付近の床に大型の列石を伴う敷石住居<sup>しきいしじゅうきょ</sup>があった。入口付近からは複数の石棒も発見されている。単なる住居というより集落内で祭りをを行う集会所のような場であったと考えられる〈絵1〉。こうした配石遺構は関東に多く、環状列石と併せて、縄文時代の東日本では祭りの場の一つとして大型の石を集めることがあったと考えられる。ところで、男性を象徴する石棒に対して、土偶は女性の人形で、土中から身体<sup>かた</sup>のどこかが欠

けて発見されることが多い。川根本町上長尾遺跡<sup>かわねほんちょうかみなが お</sup>（旧中川根町）出土の宇宙人<sup>ふうほう</sup>のような風貌の土偶〈写真4〉も、遮光器<sup>しゃこうき</sup>という木製や骨製のサングラスをかけ、柄のついたレザーのボディコンの服を着た女性だと思われる。女性の人形を故意に壊して土中に埋めていたならば、身代わりを傷つけて逆説的に女性や雌の安全を祈り、生命の誕生、大地の豊穰を期待する祭りに使われたとも考えられる。

縄文土器には様々な文様<sup>もんよう</sup>がつけられており、縄目の文様は実はその一部にすぎない。文様のなかには、単なる器の装飾を超えて意味ありげなものが存在する。男性の象徴と考えられる蛇、女性の象徴と考えられる貝<sup>かえる</sup>や蛙、赤ちゃんの顔そのものの表現は、石棒や土偶と同様、自然界の豊穰を祈るものでもあったと考えられる。流水、火炎などの比較的多い文様も自然の神秘的なパワーに対して祈っていたものとも考えられないだろうか。このように、森の木の実や水辺の貝を中心に村の周囲の様々なものを採集して生活していた縄文時代には、特に対象を絞らず、広く自

然界全体の豊穰を祈るような祭りが行われていたのではないだろうか。動植物のみならず石や土など自然のあらゆるところに生命や靈魂を感じ、信仰するアニミズム的な姿勢といえよう。それが弥生時代になると、稲作の普及に伴って農耕儀礼重視に変わっていくのであろう。また、ムラの祭りからクニの祭りへと規模も大きくなるのであろう。

### 3 「祭り」と「まつりごと」

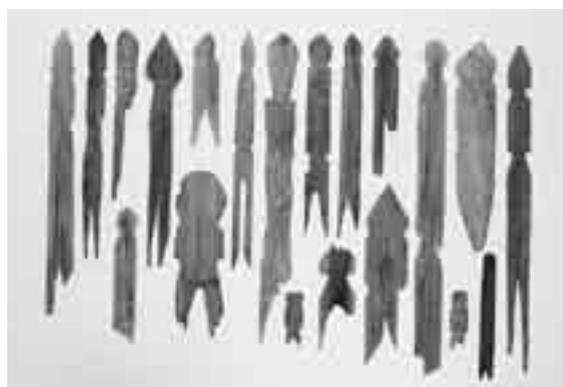
ところで、弥生時代以降の祭りはどうなっていたのだろうか。古墳時代には、古墳の内外に死者への葬送儀礼の跡が残っている。墳丘に並べられる埴輪には、前期の円筒埴輪は外の生者の世界と古墳内の死者の世界を分かち結界、中期以降の形象埴輪は副葬品の象徴や葬式、王位継承式典の模式化などという解釈がなされている。また、堅穴式石室墳の墳頂部や横穴式石室墳の入口付近でよく見つかる土器破片は、円筒埴輪と同様の結界、横穴式石室内部の大量の須恵器副葬は、土器自体の副葬というより死者への飲食物 供 献あるいは飲食を伴う葬式の形式化などと考えられる。円筒埴輪も本来器台などの土器から変化したものと考えられるので、葬送儀礼において土器を使用することが多かったのではないだろうか。

そのほか、古墳時代には、浜松市坂上遺跡、磐田市明ヶ島5号墳などで出土している、手で捏ねて焼いたミニチュア土製品を実物の代わりに祭りに使うことがあったようだ。特に、明ヶ島5号墳の盛土や下の地表からは5,000点を超える国内でも類を見ない数の様々な土製品〈写真5〉が出土した。人や動物、装身具、日用品、楽器など実にバラエティに富んだ「形代」たちである。古墳の祭りというより、祭りの場の上に古墳を築造したものと考えられる。



〈写真5〉土製模造品 (明ヶ島5号墳)

さらに、古墳時代から奈良時代にかけての祭りの一端を、静岡市神明原元宮川遺跡で知ることができる。川に投棄された形で、大量の土器や土製品の他に人形、馬形、刀形、斎串などの木製品〈写真6〉が出土した。律令に規定され、現在でも神社で行われているところのある大祓というケガレを祓う儀礼と内容がよく似ている。古墳における王位継承式典が全国で儀礼化したり、律令に沿ったいわば国家儀礼が地方でも行われたりする状況からは、本来自発的で様々だったと思われる祭りに次第に国家というものが介入していくような傾向がみられるのではないだろうか。政治は「まつりごと」ともいうのである。



〈写真6〉人形木製品 (神明原元宮川遺跡)

〈参考文献〉

『静岡県史』通史編1 原始・古代、別編3 図説静岡県史

『古代史の論点5 神と祭り』(小学館)

静岡県埋蔵文化財調査研究所『静岡の原像をさぐる』(1999年)

静岡県埋蔵文化財調査研究所『敷地西の谷遺跡出土銅鐸をめぐって』